

自衛官から弁護士になつて思うこと

第15期生

澤田 直宏

はじめに

現在、弁護士7名、事務員6名が在籍する法律事務所の所長弁護士だが、中学生の頃は、勉強嫌いで、中学卒業後は、高校には進学せずに陸上自衛隊少年工科学校に入隊して航空機整備員になった。

その後、航空自衛隊に転属してパイロットの訓練を受け始めたが、実際、飛行機を操縦してみて、自分には合わないと想い、21才で自衛隊を依願退職し、心機一転、法律家を目指して法学部に入学し、苦労の末、平成3年に37才で弁護士となつて現在に至る。

勉強嫌いが、中卒後、自衛隊の航空機整備員からパイロットになり、その後、弁護士になることができたのは、自衛隊教育のおかげであると、いまでも感謝をしている。

以下、自衛隊教育を通して、教育の本質について思うところを述べさせて頂く。

勉強嫌いになつた理由

ます勉強嫌いになつたのは、中学3年時に成績が良い生徒は普通高校、成績の悪い生徒は工業高校というように、生徒の適性や希望とは無関係に進路が決められたり、成績の良し悪しによって生徒に対する態度を変えるような教師がいたからだ。

そのため、幼かつたのか、「自衛隊に入れば勉強しなくて済む」などという極めて不純な動機で自衛隊に入隊したのである。

自衛隊での教育

ところが、自衛隊に入隊と同時に通信制高校にも入学したことになり、朝から夕方5時迄の就業時間の半分は高校教育の座学、半分は屋外での訓練というように、身体だけでなく頭も鍛えられた。

夜も就寝前の2時間位は自習室で強制的に自主勉強をさせられた。そのため、当初は、朝から晩まで24時間、集団生活の中で強制的に訓練等をさせられることに苦痛を感じた。

しかし自衛隊で高校教育を担当する専門職の教師の方々は勿論、制服自衛官の上官、先輩

らは、当時500人はいた同期生徒の全員が一人も漏れることなく、一人前の自衛官として成長できるようとの「使命感」と「愛情」をもつて接してくれていることを強く感じることができた。

いまでも忘れないのは、先輩の指導生徒が、毎晩、就寝直前に、大声で「默想！」と言って私たちに目を閉じさせた上で、「今日一日を振り返って、故郷の山河に恥じる行為はなかりしか！」などと、しみじみと指導をしてくれたことだ。

生まれも育ちも東京なので、思い浮かぶような故郷の山河はなかったが、目を閉じて默想をしながら、「そうだ、誰にも恥じない生き方をしなければ！」という、人間として一番大切な事を教わった。

また防衛大学校への進学を希望する生徒のために、教師の方々が、昼夜の貴重な時間をさして特別授業を開催してくれたこともあつた。

更に自衛隊には、電子、戦車、航空、通信、野戦特科など幾つもの専門職があり、当初は電子科に配属されていた。しかし、航空機に関心があることを上官に相談したところ、希望通り航空機の整備員になれるよう配属を変えてくれた。

自衛隊教育に携わる方々には、隊員一人一人の「個性や才能を尊重」すると共に、一人前の自衛官を育てるという強い「使命感」があつた。

最後に

そうした、自衛隊教育のおかげで、勉強嫌いだったのが、勉強が少しずつ好きになると共に、自分に自信をもって生きることができるようになった。

また自衛隊で、身の回りの整理整頓や上官に対する礼儀作法など、人として生きていく上での最低限の躾教育等も受けるなかで、自分も社会に役立つ仕事をしたいと願うようになり、弁護士になることができた。

そうした自身の体験を通して、教育の本質は、単なる知識の詰め込みではなく、人としていかに生きるべきかを教えることにある。

またそのためには、生徒の「個性や才能を尊重」し、できる限りの可能性を開き、生徒一人一人がこの世に生まれてきて果たすべき、それぞれの使命を自覚できるようにしてあげることが大切なのだ。

有名な寓話に、レンガ職人の話しがある。旅人が、レンガを積む仕事をしていた三人の職人に「ここで何をしているのですか?」と尋ねたところ、一人目は「レンガ積みに決まっているだろ。朝から晩まで、俺はここでレンガを積まなきゃいけないのさ」と答え、二人目は「大きな壁を作っているんだよ。この仕事のおかげで俺は家族を養つていけるんだ」と答え、三人目は「歴史に残る偉大な大聖堂を造っているんだ!ここで多くの人が祝福を受け、

悲しみを払つんだぜ!素晴らしいだろう!」と答えたという話しだ。

同じ仕事をするにしても、何の目的意識もなくするのか、生計を立てるためという利己目的であるのか、社会のためという使命感をもつてするのかでは大違ひと言える。

例えば、「医は仁術」という言葉があるが、医師の中には「医は算術」とでも言うような、「自身の生計を立てるために仕事をしている」、患者の立場から親身になって診療に当たろうとしないような人物をみかけることがある。同様の例は、教師、公務員、政治家などすべての職種に見ることができる。

すべての人々が、それぞれの仕事を単に自身の生計を立てるためなどという利己目的ではなく、人々を幸福にするため、社会を少しでも良くするためにとの強い「使命感」を持って仕事を従事することができたならば、どれほど素晴らしい世の中になるだろう。そうした意味から、教育はとても大切なことだ。



東京都出身
弁護士